



研究者の系譜

約70～100年前の歴史的な論文を対象に、時代背景や執筆者の思いを理解し、それらの論文を出発点とする酵素科学の発展を解説する機会をいただいた。対象には、酵素がタンパク質であるか、高分子キャリアに活性基が結合したのか、議論があった時代の論文を含む。酵素が海の物とも山の物ともつかなかった時代の論文である。汎用的なタンパク質精製技術もアミノ酸配列解析法もなかった時代である。

いくつかの仮説とそれらの正しさを嗅ぎ分けるわずかな実験事実から、仮説の真偽を判断するための実験をデザインした形跡が読み取れた。わずかな実験事実というのがなんとも頼りなく、論理的思考よりも直感で実験をデザインしたようにも見えた。「雪埋梅花不能埋香（雪、梅花を埋むれど、香を埋むること能はず）」という詩句で、わずかな実験事実が梅の香りで例えられる。この例えは学生時代から聞いていたが、ようやく本質を捉えることができた気がした。実際には、梅の香りは雪の中に埋もれると鼻に届かない。そこにあると信じるしかないくらいの頼りないわずかな現象の片鱗をたどって、未知の真理をたずねる科学者の心に通ずる詩句である。ただ、わずかな現象をできる限りの労力を割いて多く拾い集め、思考の材料にしていることは感じ取れた。

実験技術のみならず研究資材が限られる中、研究試料選別にこだわりを持っていることも感じた。研究試料はその実験の進展を左右する。進展のしやすさだけでなく、「他ではやっていない」「日本独自の」などのこだわりを重きを置いている部分もあり、ある種のプライドを大いに感じた。研究のデザインを組み立てる進め方は、現在とさほど

変わらないように感じた。しかし、この解説文を執筆するに従って、そのレジェンドと言われる研究者の系譜上に私がいて、教育を受けて、私がレジェンドに似た所作をしただけの気もした。

解説文執筆の過程で関連論文100報ほどに目を通した。レジェンドが書いた論文の数々。驚いたのは、今の常識に照らして読むと、各論文の結論は間違いだらけであったことである。ただ、論文の中のデータは、当時の実験技術で表せる精一杯の精度のウソがないデータであり、結論は最善の解釈の結果であった。結論の誤りは、現在では説明できるデータのあやふやさによるものであり、得られたデータをそのまま論文に表していると感じられることはたびたびあった。目を通した論文の執筆者はデータに対して実に誠実であった、ということである。50年100年経っても振り返ることができるように、解釈不能でも正直なデータを論文に表したいと思ったものである。そして、間違った結論は後々の論文では何事もなかったかのように無視されて、新たなデータからより良い結論を導いている。良いように捉えると柔軟さがあるということだが、それが科学の健全な発展のあり方なのであろう。完璧な論文はあり得ない。その時のベストを尽くして論文を執筆すればよい。科学の所作には、感情が入る人間臭さが入り込んでしまうが、データに対する誠実さだけは守らなければならない。

私は50代の大学教授で、そこそこの発見ができて良い論文を書いてきた自負が多少あるが、この解説文の執筆を通して、レジェンドたちが導いた道の上を私は歩かされているだけ、のような気にもなった。自分のちっぽけさを感じた、というそんな陳腐な自覚だけでなく、若干の心地良さも感じている。真っ当な科学者人生を歩ませていただいた。一方、そんな謙虚な気持ちだけで収まってはいけないとも思う。残り少ない大学教員でいられる時間のうちに、導かれた道を細くても分岐させ、存在すると信じる新しい梅に後進にたどり着かせるために、少しでも雪をかき分ける使命を感じたひと時であった。

(永遠の孫弟子)